

# ドイツ語の文法的構文ネットワーク： 結果構文と構文研究<sup>1</sup>

島 憲 男\*

## 要 旨

本論考では、対格目的語が文の主要な文肢（項）として含まれているドイツ語の3構文（結果構文・Resultative Konstruktionen, 結果拳述の目的語・Ergebnisobjekte, 同族目的語・Kognate Objekte）を取り上げ、これまでの構文研究の個別成果に基づき異なる構文間の共通性・関連性を横断的に捉えることを目的とする。今回の構文横断的な分析は、より一般的なメカニズムから個別の構文やドイツ語文法の全体像を捉え直すという試みであり、個別の構文研究の際には意識されにくい構文間の共通性や関連性、差異などの関係性を捉えようとする試みでもある。

キーワード：文法的構文ネットワーク、結果構文、構文研究、同族目的語、結果拳術の目的語

## 1. はじめに

本論考では、ドイツ語の構文を取り上げ、個別の構文ごとの研究成果に基づき異なる構文間の共通性・関連性を横断的に捉えることを目的とする。扱う構文は対格目的語が文の主要な文肢・項として生起し、論考執筆者がこれまで分析に取り組んできたものである。具体的には、結果構文（Resultative Konstruktionen）、結果拳述の目的語（Ergebnisobjekte）、同族目的語（Kognate Objekte）の3構文を取り上げる。今回の検討を通じてこれまでの研究成果を再確認するとともに、研究成果の統合も目指したい。そのために、第2章では、まず文法的な多様性に最も富む結果構文の内部構造を提示するとともに、その構文拡張の方向性を提案する。特に複雑な内部構造を有する他動詞型結果構文では、用例の文法的特性によって6種のサブタイプに区別される必要があることを提示し（2.1節）、その用例が典型的なサブタイプから非典型的なサブタイプへと拡張していくにつれて、構文中に生起する基底動詞は他動詞から自動詞に移行し、それに伴い構文中の対格目的語は基底動詞の課す直接的な意味制約から離反し、意味的自立性を強め、結果項との間に成立している2次的叙述関係の主語としての役割が前景化することを主張する（2.2節）。一方、構文中に生起する結果項が人間の知覚に深く関係するものが目立つ自動詞型結果構文では、結果状態を把握する方法に基づき2つのサブタイプに分ける必要性を提案する（2.3節）。続く第3章では、結果拳述の目的語（3.1節）と同族目的語（3.2節）

---

\* 京都産業大学外国語学部

を紹介し、それぞれの個別構文研究の成果を結果構文研究の成果に結びつけ、構文間に見られる文法的な類似性や共通性などの構文横断的な関係性を検討し、論考執筆者が最終的に目指している構文ネットワークの一端を具体的に提示する(3.3節)。最終章となる第4章では、論考執筆者のここ10年程度の研究を概観し、今後の構文ネットワーク構築の可能性を述べる。

## 2. 結果構文 (Resultative Konstruktionen)

結果構文とは、「文中のある要素が、動詞の表す行為を通じて、形容詞で示されるような結果状態に変化することを表現する文のことで、この変化を被る要素は、他動詞型の文では対格目的語として、自動詞型の文では主語としてコードされる<sup>2)</sup>」のものであると本論考では捉える<sup>3)</sup>。従って、構文中に生起する基底動詞に注目した場合、結果構文とは他動詞からも自動詞からも生み出される構文で、動詞の自他動性の両領域に広がる多様な統語的・意味的特性を有する構文と考えられる。

結果構文は従来から多数の研究者に注目され、様々な言語理論の中でも活発な議論の的となっている。その中でも Goldberg/Jackendoff (2004) の研究は、その定義において結果構文を最も広範に捉えている：

(1)

In our own work, we have treated resultatives as forming a sort of 'family' of constructions (we might call them subconstructions of the resultatives), sharing important properties but differing in certain specifics, including their degree of productivity. (Goldberg/Jackendoff 2004: 535)

その結果、これまで通常は結果構文と見なされなかったような種類の構文まで対象領域を広げている点が注目に値する：

(2)<sup>4)</sup>

- a. Bill watered the tulips flat. (Causative property resultative)
- b. The pond froze solid. (Noncausative property resultative)
- c. The ball rolled down the hill. / The truck rumbled into the station. (Noncausative path resultative)
- d. Bill rolled the ball down the hill. (Causative path resultative)
- e. They made him president/angry. (Verbal resultative)

このことは、結果構文が統一的・均質的な性質を持つ文法的構文ではなく、むしろ Wittgenstein (1953) の言う「家族的類似性 (Familienähnlichkeit)」に基づいた構造を持つ構造体であることを示している。その一方で、各下位構文の精査や下位構文間の有意味な関係が提示されないままでは、単なる分類の

域をでることはなく、結果構文全体の本質を解明したとも言い難い。

本論考では、Goldberg/Jackendoff (2004) のいう Causative property resultative と Noncausative property resultative に相当する結果構文に焦点をあてて、これら2つの「下位構文」の関係性のみならず、それぞれの「下位構文」が持つ内部の構造を明示的に分析し、下位構文1つをとってみてもその中には注目に値する「変異体」が観察されること、そしてそれらが有意義な関連を持ちながら全体としてひとつのまとまりを形成していることを示していく。なお、この2つの下位構文は、Lüdeling (2001) などの先行研究でいう「他動詞型結果構文」(Transitive Resultative Konstruktionen: TRK) と「自動詞型結果構文」(Intransitiven Resultativen Konstruktionen: IRK) に相当している<sup>5</sup>。

## 2.1 他動詞型結果構文 (TRK) : S + V + O + A (RP)

他動詞型結果構文は、Goldberg/Jackendoff (2004) の命名法からも、また Brinkmann (1962/1971<sup>2</sup>: 249) の指摘からも明らかなように、その基本形は使役構文の構造に見てとれる (関口 (1953/1982<sup>19</sup>: 453; 1979<sup>7</sup>/1994: 45) など参照)。また、Brinkmann が指摘する通り、構文中の形容詞は、副詞とは異なり、動詞の描写する過程の経過を修飾するのではなく、変化した対格目的語の結果状態を確定している<sup>6</sup>：

(3)<sup>7</sup>

- a. Er fegte *den Boden* sauber.
- b. *einen wach* küssen
- c. Er hustete *seinen Nachbarn* krank.
- d. Der Kaffee steht schon seit ein paar Minuten auf dem Tisch: wir haben *ihn* kalt geplaudert.
- e. Eine alte Frau schreit *sich* heiser.
- f. Deine Krankheit kommt vom Müßiggang, jetzt mußt du *dich* doch endlich einmal gesund arbeiten.
- g. Peter tanzt *seine Partnerin* müde.
- h. Hier sind eine Menge krumme Nägel; du sollst *sie* mit diesem Hammer gerade klopfen.
- i. Er aß *seinen Teller* leer.
- j. Ich habe die Nacht durchgewacht und mir *die Finger* wund und *die Augen* rot geschrieben.
- k. Er hat *sich* satt gegessen.
- l. Ein Dieb stiehlt *sich* selten reich.

上記 (3) に示した用例は、全て他動詞型結果構文の定義に当てはまるものである。統語上の形式は SVOA の型を共通に持ち、対格目的語と形容詞の間には叙述関係<sup>8</sup>が成立している点も共通している。しかし、その文法的な性質は均一ではなく、3つの分類基準(Kriterien)、すなわち「結果項(RP)」,

「基底動詞 (Basisverb)」そして「目的語」によっていくつかのタイプに下位区分できる。第1の「結果項」による基準とは、当該の結果構文にとって、「結果項」が統語的に随意的 (fakultativ) か義務的 (obligatorisch) かについての基準で、いわば「構文中における結果項の文法的自由度・従属度」に関するものである。すなわち、どの程度まで結果項が構文と一体になっているかを問うパラメータであると言えよう。情報構造の観点からは当然情報量が削減されるものの、一部の結果構文の中には結果項を省略しても文法性という観点からは問題の生じない「統語的には任意な形容詞」を持つグループ (Subtyp 1 [= ST 1]) と、結果項を削除することで非文 (\*) や無意味文 (#) となる「統語的に義務的な形容詞」を持つグループに大別できる：

(4)

- a. Er fegte *den Boden* <sup>ok</sup> (sauber). [ST 1]
- b. *einen* <sup>ok</sup> (wach) küssen [ST 1]
- c. Er hustete *seinen Nachbarn* \* (krank).
- d. Der Kaffee steht schon seit ein paar Minuten auf dem Tisch: wir haben *ihn* \* (kalt) geplaudert.
- e. Eine alte Frau schreit *sich* \* (heiser).
- f. Deine Krankheit kommt vom Müßiggang, jetzt mußt du dich doch endlich einmal \* (gesund) arbeiten.
- g. Peter tanzt *seine Partnerin* \* (müde).
- h. Hier sind eine Menge krumme Nägel; du sollst *sie* mit diesem Hammer \* (gerade) klopfen.
- i. Er aß *seinen Teller* # (leer).
- j. Ich habe die Nacht durchgewacht und mir *die Finger* # (wund) und *die Augen* # (rot) geschrieben.
- k. Er hat *sich* # (satt) gegessen.
- l. Ein Dieb stiehlt *sich* selten # (reich).

構文にとって義務的な結果項を持つ一群 (4c-l) は、結果項を削除することにより完全に非文になるグループ (4c-h) と、文法的には不可能ではないものの、意味的には日常的な通常の言語使用から逸脱してしまっている文になるグループ (4i-l) に大別できる。第2の基準である基底動詞の観点から言えば、前者の基底動詞は自動詞で、後者は他動詞であると判断できる。前者のグループを Subtyp 2 [= ST 2], 後者を Subtyp 3 [= ST 3] と命名すれば、ST 2 とは、結果構文という構造の中では基底動詞が自動詞であっても、対格目的語の生起が許されるグループであり<sup>9</sup>、形容詞が削除され

て結果構文の構造が取り消されれば、基底動詞は本来的には自動詞であるがゆえに対格目的語を支配できず非文となるグループであると言える：

(5)

- a. \*Er hustete *seinen Nachbarn* \_\_\_\_.
- b. \*Der Kaffee steht schon seit ein paar Minuten auf dem Tisch: wir haben *ihn* \_\_\_\_ geplaudert.
- c. \*Eine alte Frau schreit *sich* \_\_\_\_.
- d. \*Deine Krankheit kommt vom Müßiggang, jetzt mußt du dich doch endlich einmal \_\_\_\_ arbeiten.
- e. \*Peter tanzt *seine Partnerin* \_\_\_\_.
- f. \*Hier sind eine Menge krumme Nägel; du sollst *sie* mit diesem Hammer \_\_\_\_ klopfen.

他方、ST 3 では、基底動詞が他動詞であるため、統語的には依然として対格目的語の生起が可能ではあるものの、意味的には日常的な状況から大きく逸脱するような異質な意味を持つ文が存在することになる：

(6)

- a. \*Er aß *seinen Teller* \_\_\_\_.
- b. \*Ich habe die Nacht durchgewacht und mir *die Finger* \_\_\_\_ und *die Augen* \_\_\_\_ geschrieben.
- c. \*Er hat *sich* \_\_\_\_ gegessen.
- d. \*Ein Dieb stiehlt *sich* selten \_\_\_\_.

最後にこれら2つのサブタイプ (ST 2, ST 3) の中に生起する対格目的語の種類に注目すると、語彙項目 (非再帰形) か再帰形かといった形態的相違が見られるため、それぞれのサブタイプの中で語彙的な対格目的語を有するグループ (5a-b, 5e-f; 6a-b) と対格目的語が再帰形で生起するグループ (5c-d; 6c-d) とに大別できる。その結果、最終的には ST 2a (5a-b), ST 3a (6a-b), ST 2b (5c-d), ST 3b (6c-d) の4区分ができる。

なお、この第3の基準である対格目的語の生起形式について、ST 2には特に注目に値する「第3の」サブタイプがさらに確認される。自動詞を基底動詞とする ST 2 は、(5) の例文が示す通り、形容詞の削除により非文となる。しかし、その非文は全てが一様ではなく、一部には適切な前置詞の介在により文法的な文となるものも存在する。例えば、以下で (7) が示すように、動詞と目的語の間に適切な前置詞を介在させることで文法的な文となるグループが存在するのである<sup>10</sup>：

(7)

- a. Peter tanzt **mit** *seiner Partnerin*. [cf. 5e]

- b. ...; du sollst **auf sie** (=darauf) mit diesem Hammer klopfen. [cf. 5f]

この一群を独立したサブタイプ (Subtyp 2c [= ST 2c]) として認定すれば、自動詞を基底動詞とする ST2 は、結果構文中の対格目的語の性質に応じて3種類に細分化できることになる。すなわち、語彙的な対格目的語を有するグループ (ST 2a)、対格目的語が再帰形で生起するグループ (ST 2b) そして潜在的には前置詞を有する対格目的語の一群 (ST 2c) である。なお、ST 2cの結果構文中に前置詞が残ると非文となることから (8a, b 参照)、潜在的な前置詞と結果項は相補分布をする：

(8)

- a. \*Peter tanzt **mit seiner Partnerin müde**.  
 b. \*du sollst **auf sie** mit diesem Hammer gerade klopfen.

ここまでの議論をまとめると、他動詞型結果構文には以下に示すような6種類のサブタイプが仮定できることになる：

6つのサブタイプ (Subtypen : ST)

表 1: TRK の分類 (Shima 2020: 155, 一部修正・変更有)

結果項	主動詞	目的語	サブタイプ
随意的	他動詞		<p>ST 1: S Vt O A</p> <p>① Er fegte <i>den Boden sauber</i>.            ② <i>einen wach</i> küssen</p>
義務的	自動詞	語彙項目	<p>ST 2a: S Vi O A</p> <p>③ Er hustete <i>seinen Nachbarn krank</i>.            ④ Der Kaffee steht schon seit ein paar Minuten auf dem Tisch: wir haben <i>ihn kalt</i> geplaudert.</p>
		再帰形	<p>ST 2b: S Vi <i>sich</i> A</p> <p>⑤ Eine alte Frau schreit <i>sich heiser</i>.            ⑥ Deine Krankheit kommt vom Müßiggang, jetzt mußt du <i>dich</i> doch endlich einmal <u>gesund</u> arbeiten.</p>
		前置詞格	<p>ST 2c: S Vi <del>P</del> O A</p> <p>⑦ Peter tanzt <i>seine Partnerin müde</i>.            ⑧ Hier sind eine Menge krumme Nägel; du sollst <i>sie</i> mit diesem Hammer <u>gerade</u> klopfen.</p>
	他動詞	語彙項目	<p>ST 3a: S Vt O A</p> <p>⑨ Er aß <i>seinen Teller leer</i>.            ⑩ Ich habe die Nacht durchgewacht und mir <i>die Finger wund</i> und <i>die Augen rot</i> geschrieben.</p>
		再帰形	<p>ST 3b: S Vt <i>sich</i> A</p> <p>⑪ Er hat <i>sich satt</i> gegessen.            ⑫ Ein Dieb stiehlt <i>sich</i> selten <u>reich</u>.</p>

## 2.2 他動詞型結果構文の内部構造：サブタイプ間の関係とサブタイプモデル

他動詞型結果構文では6種のサブタイプが区別できると主張したが<sup>11</sup>、これらのサブタイプは互いに無関係なものでも偶発的なものでもなく、サブタイプ間に有意義な意味づけが可能であり、それを図示すれば、以下の図1で示されるような、Lakoff (1987) のいう「放射状の構造 (eine radiale Struktur)」を形作りながら他動詞型結果構文という1つの文法的カテゴリーを形成していると考えられる：

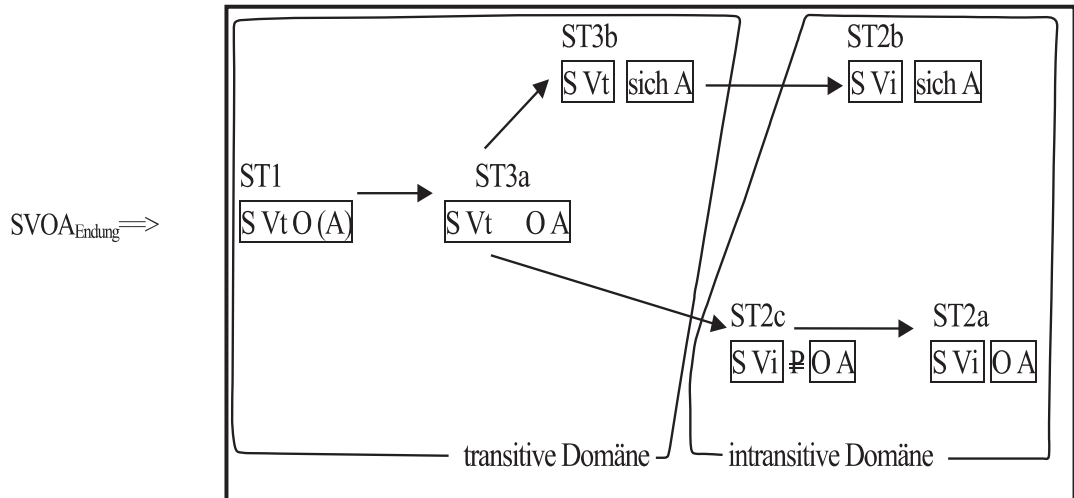


図1: 他動詞型結果構文の放射状構造 (Shima 2020: 157, 一部変更有)

Brinkmann (1962/1971<sup>2</sup>: 249) や関口 (1953/1982<sup>10</sup>: 453; 1979<sup>7</sup>/1994: 45) が指摘する通り、他動詞型結果構文は、対格の形容詞語尾消失と使役動詞 *machen* への手段・方法の意味の語彙化によりその基本形が生じ、文法化の過程を経て構造を変化・拡張させている構文であると考えられる (Shima 2010a)。そのため、図1で示した「他動詞型結果構文のサブタイプモデル」ではST1を最も基本的な構造と仮定している。ST1に生起する結果項である形容詞は、括弧付きの表示が示すように、この段階ではまだその有無によって文全体の文法性に影響を与えるほど必須度の高い項ではない。もちろんST1も結果構文である以上、動詞が統語的・意味的に支配している対格目的語と、結果構文中の形容詞との間には叙述関係が認められるが、特別その叙述関係が結果構文の中で突出しているわけではなく、動詞の意味から想定される結果状態を具現化する働きを担っているだけである。

次の段階であるST3aに移行すると、基底動詞と対格目的語の意味関係が変化し、それに伴い、形容詞と対格目的語の間にある叙述関係が前景化されるようになる。ST3aの基底動詞は他動詞であるため、対格目的語を統語的に支配する能力は有しているものの、基底動詞が対格目的語に課している意味的な選択制限が変質し、他動詞と目的語との間の意味関係がより間接的なものになっている。図1ではこの意味的な変化を動詞と目的語の間の相対的な距離で示している。例えば、表1の例文⑨では、結果を描写する形容詞 *leer* と叙述関係を結んでいる対格目的語 (*seinen Teller*) は、動詞 *essen*



が本来的に目的語として要求する「食物」ではなく、その食物の「存在場所」である<sup>12</sup>。構文中で結果項として機能する形容詞は ST 1 と比較した場合、より緊密に構文に取り込まれ、もはや削除不可能な義務的な項へと変化している。

この後、結果構文が拡張していく道は大きく 2 つに分かれる。構文中に生起する対格目的語が再帰形に固定されている系列 (ST 3b - ST 2b) と、語彙的な目的語を保持する系列 (ST 2c - ST 2a) である。ST 3b - ST 2b の系列では、ST 3a の持つ「動詞が対格目的語に課す選択制限の変化」や「対格目的語と結果項との間の叙述関係の前掲化」を引き継ぎつつ、主語と主語が働きかけを行う対象である対格目的語との境界が希薄化・形式化していく。統語的には主語と対格目的語にそれぞれ格表示されてはいるものの、生起する対格目的語が再帰形に限定されることから意味的には対格目的語と主語との同一性を保証し、対格目的語と形容詞から成る 2 次的叙述関係は間接的・結果的に主語の結果状態を描写することになる。もともと動詞が対格目的語に課す選択制限が変化していることに加えて、ST 3a の場合と同様、ST 3b の動詞群も自他両用法を持つため、動詞と対格目的語との間の統語的な結びつきは他動詞を基底動詞とする ST 1 の場合より緩やかになっているとも言え、最終的には自動詞を基底動詞とする次の ST 2b へと繋がっていくと考えられる。言い換えれば、他動詞型結果構文の形式的枠組みは系列全体で踏襲しながらも、まず動詞と対格目的語の間に存在していた選択制限に生じた変化のため両者の意味的な断絶が生まれ、次第に動詞の持つ自動詞的用法に焦点が移っていく。加えて、対格目的語と結果項の叙述関係の中で、再帰形として生起する対格目的語は、自動詞文同様、実質的な文の参加者が主語で示される対象のみであることを表すため、統語形式上は他動詞型の構文を保持しながらも、意味的には主語で示される対象の行為とその結果状態を描写する、限りなく自動詞文に近い表現になっていると解釈することが可能となり、最終的には基底動詞を自動詞とする ST 2b の用法へと結びついていくと考えられる。

ST 3a からのもう一方の拡張ルートである ST 2c - ST 2a の系列は、他動詞型結果構文が語彙的な対格目的語を保持する系列である。ST 3a では基底動詞が対格目的語に課している意味的な選択制限がすでに変質し、他動詞と対格目的語との間の意味関係が間接的なものになっている<sup>13</sup>が、ST 2c ではさらに動詞が自動詞となり、本来的には統語的にも動詞単体では対格目的語を直接支配することはできなくなる。しかし、上記の例文 (7) で提示したように、適切な前置詞の仲介により動詞と対格目的語との間を間接的に結びつけ、文法的で有意な統語的連鎖を生み出すことはまだ可能な段階なのである。ここで「間接性」という表現が暗示するように、想定されている統語的な仲介者である前置詞は実際の他動詞型結果構文中に生起することはできない。ST 2c では、意味的にも統語的にも自動詞と対格目的語との直接的な文法関係が ST 3a よりもはるかに希薄で間接的になっている。しかし、ひとたびドイツ語のパターンとして ST 2c が認知されるようになれば、他動詞型結果構文中の自動詞と対格目的語の間に意味論的にも統語論的にも直接的な関係が乏しい ST 2a のパターンに移行することもそれほど難しいことではなく、また実際のドイツ語では ST 2a に分類されるような実例が、一時的な用法であったとしても、生産的かつ効果的に使用されるようである<sup>14</sup>：



(9) <sup>15</sup>

- a. Eine Arbeit für einen, der sich gerne *die Ohren wund* telefonierte.<sup>16</sup>  
 b. Ich hätte mir nicht jahrelang *die Lippen und die Knie wund* beten müssen.<sup>17</sup>

以上をまとめれば、拡張された2系列（ST 3a - ST 3b - ST 2bの系列とST 3a - ST 2c - ST 2aの系列）の他動詞型結果構文では、主語と動詞が1つの事象を、そして対格目的語と結果項が別の独立した事象を表現し、互いに関連は持ちながらも2つの事象を1つの文の形式で表現していると言える。他動詞型結果構文は上述2.1節のようなサブタイプごとの多様性を有しつつも、それでも全体としてはひとまとまりの文法的カテゴリーに属すると考えられる。その根拠は、サブタイプ全てが共有するSVOAという他動詞型結果構文の統語的な実現形式とその統語形式が表す意味であり<sup>18</sup>、プロトタイプに見られる各要素を現実世界の状況に適合させながら、構文の適応範囲を拡張し続けられると考えられる。他動詞型結果構文のサブタイプモデルは、Goldberg/Jackendoff (2004) で下位構文の1つとして仮定されたCausative property resultative自体も実は均質的なものではなく、その内部にはさらに統語的・意味的多様性が存在していることを示している。しかしその多様性は充分動機づけられており、互いに有意味に関連し合い、放射状の構造を形作りながら、1つの文法的なカテゴリーを形成していることを表している。さらに、いわゆる結果構文の「誇張用法 (Hyperbel)」は対格目的語が再帰形に限定され、意味的にも熟語的なものが生じやすい拡張型のサブタイプであるST3bやST2bにのみ観察されるといった一般化も可能となる。以下の例文は他動詞型結果構文の形式をとりながらも、現在では通常字義通りの意味には理解されず、結果項を強意的に使っているものである。

(10) <sup>19</sup>

- a. Sie lachten *sich krank*.  
 b. Die Kinder haben *sich totgelacht*.  
 c. “Ich könnte *mich schwarz* ärgern, daß ich gestern abend keinen Dienst hatte”, sagt einer von ihnen [= Köbessen]. (Shima 2010a: 9 ; 一部変更有)

### 2.3 自動詞型結果構文 (IRK) : S + V + A (RP) <sup>20</sup>

これまでの結果構文研究では、論考執筆者はまず始めに他動詞型結果構文の分析に力を注いできた。しかし構文中の結果項が果たしている構文的機能や働きを調査するために日独語の物語を手掛かりとして自動詞型結果構文に注目して分析を行った結果、自動詞型結果構文に生起する結果項は、色や光、音といった人間の知覚に深く関係するものが目立っていることに思い至った<sup>21</sup>。特に色彩表現に関する用例は多数を占め、物語の場面描写をより具体的に、より生き生きと描き出し、イメージしやすくするのに役立っている：

(11) <sup>22</sup>

- a. “Verzeihung bitte, aber *mein Schwanz* war so steif gefroren wie ein Spazierstock...” (Shima 2020: 158 ; 一部変更有) <sup>23</sup>
- b. *Die Sterne des Orion-Gürtels* flimmerten grün und orange. (Shima 2020: 158) <sup>24</sup>

自動詞型結果構文では、他動詞型結果構文とは異なり、構文中に生起する結果項の統語的性質によって細分化する事はできない。自動詞型結果構文に生起する基底動詞はいわゆる完全自動詞であり、結果項は基底動詞にとって文法的には義務的な必須成分ではないからである。それにもかかわらず、自動詞型結果構文の結果項は、他動詞型結果構文の場合同様、基底動詞の表す行為や過程から想定される結果状態を具現化するという意味論的機能を有している<sup>25</sup>。そこで、論考執筆者は自動詞型結果構文の詳細を分析するにあたり、結果項の表している結果状態の把握がどのようになされているかを分類基準とした。具体的には、結果状態の把握が客観的・物理的なものか (objektiv)、あるいは主観的なものなのか (subjektiv) で二分する必要があると判断した。

上記の例文 11a は、従来から先行研究でも取り上げられるような典型的な自動詞型結果構文の例である。尻尾が凍ってしまった結果生じた結果状態である「コチコチに (steif)」は、基底動詞 frieren の表す凍結過程から通常想定される結果状態を具現化したもので、第三者でも容易に共有できる結果状態として客観的・物理的な状態変化として表現されている。それに対して、例文 11b の基底動詞 flimmern は元来は「光の反射や輝き」を意味する動詞であり<sup>26</sup>、星が輝いた結果新たに生じた結果状態として当該の星が「(別の色から) 緑や橙に」なったわけではない。基底動詞 flimmern の表す反射・閃光過程から通常想定される結果状態が「緑や橙」で、それが結果項として具現化したものでももちろんない。ごく無難な、常識的な解釈をすれば、結果項が表す「緑や橙」は、すばるや参の星が輝いている時の状態を説明する描写述語 (depiktiv) となるだろう。確かに例文 11b の結果項「緑や橙」が、例文 11a のような客観的にも容易く知覚できるような、典型的な結果項の例ではないという点はその通りである。しかし、この「緑や橙」が、ちらちら輝いている「すばるや参の星」の状態を単に描写していると理解するだけでなく、そこにはちらちら輝く「すばるや参の星」を知覚し、その輝きを緑色や橙色に感じ、その知覚内容を言語化する人間 (あるいはより一般的に言えば、知覚する主体・知覚者) の存在が、前提とされていると考えなければならないのではないだろうか。この知覚者は典型的にはもちろん人間であり、実際の描写場面には必然的に存在しているにもかかわらず、文中には必ずしも言語化されて生起するわけではない。自動詞型結果構文では変化を被る客体が主語として言語化されるからである。例文 11b のすばるや参の星は自ら光る恒星であるため、もともと備わった本来の色も厳密には測定可能であろう。しかしその色が、必ずしも緑や橙でなければならないわけではない。重要なのは、知覚者が輝いているすばるや参の星をどのように知覚し、その知覚内容をどのように言語で表現するかであり、本来のすばるや参の星の厳密な色彩同定が重要なわけではないからである (Croft 1991: 89 も参照)。このように考えると、例文 11b のすばるや参の星が緑や橙に輝くと

いう事象は、自動詞で言語化された「すばるや参の星がちらちら輝く」という事象を知覚者がまず知覚し、その知覚した結果を知覚者自身の主観的な判断として「緑や橙」と言語化したという意味で、十分結果的であるとは考えられないだろうか。言い換えれば、主語としてコード化されている die Sterne des Orion-Gürtels に関わる色彩用語 grün und orange は、主語の本来的な色彩に基づいているのではなく、知覚者の知覚結果に基づいて言語化された主観的な判断結果なのである<sup>27</sup>。例文 11a が主語の結果状態を客観的に描写する自動詞型結果構文であるとすれば、例文 11b で検討したものは、言わばその拡張型とも言えるもので、主観的に知覚された結果状態を描写する自動詞型結果構文と呼ぶことができるであろう。本論考では、前者の自動詞型結果構文を Subtyp 4 (= ST 4)、後者の自動詞型結果構文を Subtyp 5 (= ST 5) として区別する<sup>28</sup>。

自動詞型結果構文でも、他動詞型結果構文の場合と同様、サブタイプを仮定したが、この2種のサブタイプを上記に示した図1の中に組み込み、他動詞型及び自動詞型の双方を含む結果構文全体の「内部構造」を図2として提案する：

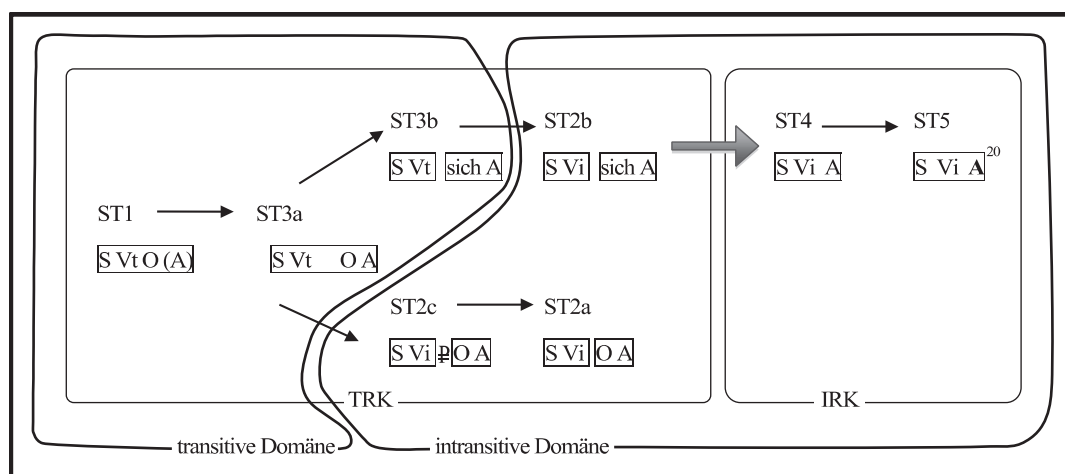


図2: ドイツ語結果構文の内部構造 (Shima 2020: 161, 一部変更有)

結果構文全体は、まずコード化の形式によって大きく2種類に区分される。他動詞型結果構文 (Transitive Resultative Konstruktionen: TRK) の ST 1, ST 2, ST 3 と自動詞型結果構文 (Intransitive Resultative Konstruktionen: IRT) の ST 4, ST 5 である。他動詞型結果構文に生起するサブタイプの基底動詞は、他動詞のみならず (ST 1, ST 3a, ST 3b)、自動詞の場合 (ST 2a, ST 2b, ST 2c) もあるため、他動詞型結果構文は、その名の通り、コード化の観点からは「他動詞型領域 (transitive Domäne)」に属するものの、基底動詞の観点からみた場合は「他動詞領域」の中にすでに「自動詞領域 (intransitive Domäne)」が散見する非均一的構造となっている。この「他動詞型領域の中の自動詞領域」は、典型例からの拡張を重ね、他動詞型結果構文のモデル中で枝分かれ (ST 3a) 後の2系列で共に終端に位置している。このことは、他動詞型結果構文が他動詞を基底動詞とする典型例から

自動詞を基底動詞とする非典型例にまで統語的・意味的な特性を変化させながら拡張していったことを示す。一方で、自動詞型結果構文では、他動詞型とは異なり変種は限定的で、コード化の観点からも基底動詞の観点からも「自動詞性」のみが確認される。文中に生起する項の数が限られていることも一因なのであろうが、統語的な変種や拡張は認められなかったものの、結果項の文中での意味解釈が客観的・物理的の把握から主観的の把握へと変化している<sup>29</sup>。自動詞型結果構文の ST 4, ST 5 が、枝分かれした 2 系列のうち上部の「再帰形」系列 (ST 3a - ST 3b - ST 2b) と関連するのは、この一連の方向が通常他動詞が再帰動詞を経て自動詞と関連づけられるといった文法的な連続性、つまり「語彙的な対格目的語を有する他動詞 - 対格の再帰代名詞を有する再帰動詞 - 自動詞」のスケールとも一致するからである。さらに、基底動詞の観点からみた場合、「自動詞領域 (intransitive Domäne)」が自動詞型結果構文の枠を超えて、他動詞型結果構文の領域にも及ぶ、「入れ子型の構造」を形成している。なお、他動詞型結果構文の領域 (ST 2b) から自動詞型結果構文の領域 (ST 4) への関係性を異なる矢印で示しているのは、この間の関係が他の場合と同様、「拡張・派生」の関係で関連づけることが可能であるか、今後検討する必要があると考えているからである。

### 3. 結果構文とドイツ語の諸構文

#### 3.1 被成目的語 (effizierte Objekte) / 結果 [挙述] の目的語 (Ergebnisobjekte)

被成目的語とは「動詞の表す行為を通じて初めて生み出される目的語」を意味し、ドイツ語の伝統文法では、一般に、「目的語の存在が動詞の行為とは独立に前提とされ、動詞の表す行為によって変化を被る目的語」である被動目的語 (affizierte Objekte) と対比して論じられることが多い<sup>30</sup>。関口存男は被成目的語に対し、結果挙述の目的語という術語を用いて (関口 1931/1994: 352; 関口 1953/1982<sup>19</sup>: 457 f.), ドイツ語の文法に存在する「結果表現」という巨大な意味場の分析を行った:

(12) 被成目的語 (= 結果挙述の目的語)<sup>31</sup>

- a. Karl strickt einen Topflappen. (Eisenberg: 1998/2000: 26)
- b. Kaffee kochen (DGWDS: 'effiziert' 中の例文)

Duden の文法書 (2009: 392) には、被成目的語は特定の動詞類と結びついていることが指摘されている。具体的には、生成動詞 (Verben des Schaffens) である *schaffen*, *bauen*, *schreiben*, *verfassen* などと並んで、*vernichten*, *aufheben* といった消滅動詞 (Verben des Vernichtens) も記載されている。対格が動詞の表す行為の終着点を示す格であるとすれば (Curme 1977: 489 を参照), 生成動詞が「無から有への生成」を意味し、消滅動詞はその真逆の過程である「有から無への消去」によってその存在を完全に失ってしまうことになる対格目的語が、被成目的語に属すると考えることは充分納得のいくものである。また、動詞が目的語に与える意味的な関与や、動詞と対格目的語との間の文法関係には様々な段階が考えられるが、被成目的語を対極的な 2 種類の動詞類と結びつけたことは、目的語と

動詞類との関係をスケール上で示した場合、そこには以下のように相反する2つの極が存在することを意味する (Shima 2011: 60; 一部変更あり)：

(13)

生成動詞 ----- 消滅動詞  
 被成目的語 - 被動目的語 - 被成目的語

被成目的語が基底動詞の意味作用で生起されるとすると、結果構文とはどのような関係を持ちうるのだろうか。結果構文は、その定義から基底動詞が表す事象の結果、目的語あるいは主語として言語化されている項が変化を被り、その最終的な結果状態を結果項が規定する構文である。言わば基底動詞と、形容詞で具現化されている結果項の相互作用によって対格目的語あるいは主語の結果状態を決定する構文であると言える。それに対して、被成目的語は基底動詞の意味作用のみで生起可能となる。つまり、結果構文中の対格目的語や主語は、動詞の表す行為が直接的、間接的に向かう対象として、動詞の描写する事象とは別にすでに存在していることになる。言い換えれば、結果構文中の対格目的語は、被動目的語と解釈することができる。両構文は、最終的な結果状態を表す表現手段という意味的な共通性は有するものの、その結果状態に至る名詞句の意味的な性質という観点からは十分異なる構文と言える<sup>32</sup>。

### 3.2 同族目的語 (Kognate Objekte) / 内在的目的語 (Innere Objekte)

同族目的語とは、動詞と同語源を持つ対格名詞句で、典型的には自動詞の基底動詞とともに生起する。ドイツ語の文法研究では、伝統的に「内在的目的語」という術語が使われてきた<sup>33</sup>。同族目的語は、形態的・統語的・意味的観点から典型的な対格目的語とは異なる性質を有しているが、言語類型論での研究成果を視野に入れつつ同族目的語が文中で果たしている機能を Hopper/Thompson (1980: 252) の提唱する他動性に関する十種のパラメータに従って考察した場合、同族目的語の有無により相対的な他動性にわずかながら差が生じていることが認められる<sup>34</sup>：

(14)<sup>35</sup>

- a. Du hast **einen temperamentvollen Tanz** getanzt. (Schulz/Griesbach 1960/1972: 220)
- b. Er lebt **ein trauriges Leben**. (Brinkmann 1962/1971<sup>2</sup>: 410)
- c. Sie kämpft **einen schweren Kampf**. (Götze/Hess-Lüttich 1989: 94)

同族目的語構文は、最も狭義の解釈をとった場合、自動詞を基底動詞とする文中で対格目的語を生起させる文法的な「他動詞化メカニズム」を持つ構文と考えられ、他動詞型結果構文の非典型的なサブタイプ (ST 2) との類似点を持つ。この共通点は、例えば、特定の構文の中で自動詞の他動性が高



められ、対格の生起が可能になったと説明することも可能ではあろうが、その場合高められた他動性の程度が一律ではない点の説明が必要となる：

(15)

- a. Er hat sich die Füße wund gelaufen. (Rapp 1997: 108)
- b. Meine Großtante ist einen schlimmen Tod gestorben<sup>36</sup>. (Duden 2009: 814)

自動詞用法の *laufen/sterben* は完了の助動詞には *sein* が選択される (*sein* 支配) が、例文 15a が示すように、結果構文中では *haben* 支配に変化する。一方、例文 15b の同族目的語では、同族目的語の生起による完了の助動詞の変化は観察されない。この文法的な振る舞いの違いは、使役動詞を原点とする他動詞型結果構文のサブタイプである ST 2 と、自動詞文を原点とする同族目的語構文との間の他動性の差異から説明することができるかもしれないが、それぞれの文肢の生起による他動性の変化は、他動詞型結果構文の方が大きいと考えられる。

さらに同族目的語が構文中で果たす意味機能（構文的機能）としては、自動詞型結果構文の ST 5 に生起する結果項が担う構文的機能と酷似している。論考執筆者は同族目的語を取るとされる動詞を先行研究より抜き出し、意味地図（semantic map）を作成した（Naruse-Shima/Shima 2013）が、そこで抽出した同族目的語の構文的機能は、「話者が自身の感覚器官を通じて知覚した外界の刺激や情報をどのように理解し、把握・解釈したかを言語的に表示するメカニズム」（島 2019a）とまとめることが可能で、この同じ構文的機能を自動詞型結果構文の ST 5 に生起する結果項も担っていると考えられる（Shima 2019b）。

### 3.3 構文ネットワーク

この節ではまとめとして、結果構文と今回分析した各構文との接点がドイツ語の文法体系の中でどのようなになっているかを考察し、構文間のより有機的な構文ネットワークの構築の第一歩を目指したい。

本論考では、結果構文を出発点として関連する構文の文法的な関係性を構文横断的に考察することを試みた。出現や消失といった目的語全体に関わる意味を表す高い他動性を示す動詞と共に生起する被成目的語、同語源の自動詞文に生起して自動詞文の他動性を相対的に高める働きを持つ同族目的語と、今回分析したものは全て他動詞型の構文パターンを持つものである。その中で結果構文と同族目的語構文は基底動詞が他動詞・自動詞の両領域に存在する。結果構文では基底動詞が他動詞から自動詞へと拡張していき、自動詞領域においても他動詞型のコード化を維持するために構文中では他動詞化メカニズムが機能していると考えられる。同族目的語構文は、他動詞を基底動詞とした同族目的語も報告されており、少なからず存在していると考えられるものの、基本的には基底動詞は自動詞であり、構文全体としてはやはり他動詞型のコード化をする構文となっている点で、他動詞化メ

カニズムが働いていると考えられる。また、(他動詞型) 結果構文に生起する対格目的語が被動目的語であるのに足して、同族目的語は動詞の表す行為によって始めて生成されるという点で被成目的語である。つまり、今回分析した構文は2つのパラメータ(基本形から拡張形への方向と、拡張形を生み出す変換メカニズム)の点で異なる構文であるといえる<sup>37</sup>。

上記の内容は、2つのパラメーターにより、以下に示した表2のようにまとめられよう。

表2：2つのパラメータによる分類

		基本形から拡張形への方向	
		自→他	他→自
基底動詞からの変換メカニズム	他動詞化	同族目的語	結果構文
	自動詞化	?	中間構文

すなわち、同族目的語構文とは、基底動詞を自動詞とする基本形が他動詞を基底動詞とする用例にまで広がっている構文で、自動詞領域では文中に必須項を1つ増やすという他動詞化のメカニズムが関与しているものということになる。それに対して、結果構文は、基底動詞を他動詞とする基本形が、自動詞を基底動詞とする用例にまで拡張している構文で、自動詞領域では文中に必須項を1つ増やすという他動詞化メカニズムが関与している。さらに、結果構文同様、基底動詞を他動詞とする基本形が、自動詞を基底動詞とする用例にまで拡張している構文ではあるものの、他動詞領域では文中に生起している必須項を1つ減らすという自動詞化メカニズムが関与しているのが中間構文であると考えられる。その一方で、同族目的語構文同様、基底動詞を自動詞とする基本形が、他動詞を基底動詞とする用例にまで拡張し、他動詞領域では文中に生起している必須項を1つ減らすという自動詞化メカニズムが関与している構文が論理的には想定されることになるが、ドイツ語の文法には存在しているのであろうか。もしドイツ語のみならず、他言語でも存在しないとすれば、それは何故なのか。今後さらに調査していく必要がある。

さらに、今回の分析結果を図で示せば、以下に示した図3のようにまとめられるであろう。図3では、構文のより基本的・典型的な形式からより非典型的な拡張形式への方向を丸で囲み、その際に機能すると考えられる他動詞化あるいは自動詞化のメカニズムを四角で囲っている。また、構文間で見られる同種の項目は二重線で結び、対立項目同士は矢印で表した。ここからさらに読み取れることは、どれも対格目的語を有する構文だが、その対格目的語の実現形式には、必ず語彙形式で生起する結果挙述の目的語を頂点に、下に向かうにつれ次第に形式的な条件が付け加わっていくことである。結果構文では、ST 1, ST 2a, ST 2c, ST 3a の場合のように語彙形式の対格目的語も生起するが、ST 2b と ST 3b では対格目的語は再帰形に固定される。さらに同族目的語構文の場合は、典型的には動詞



と同語源の語彙形式という制限がかかることになる。

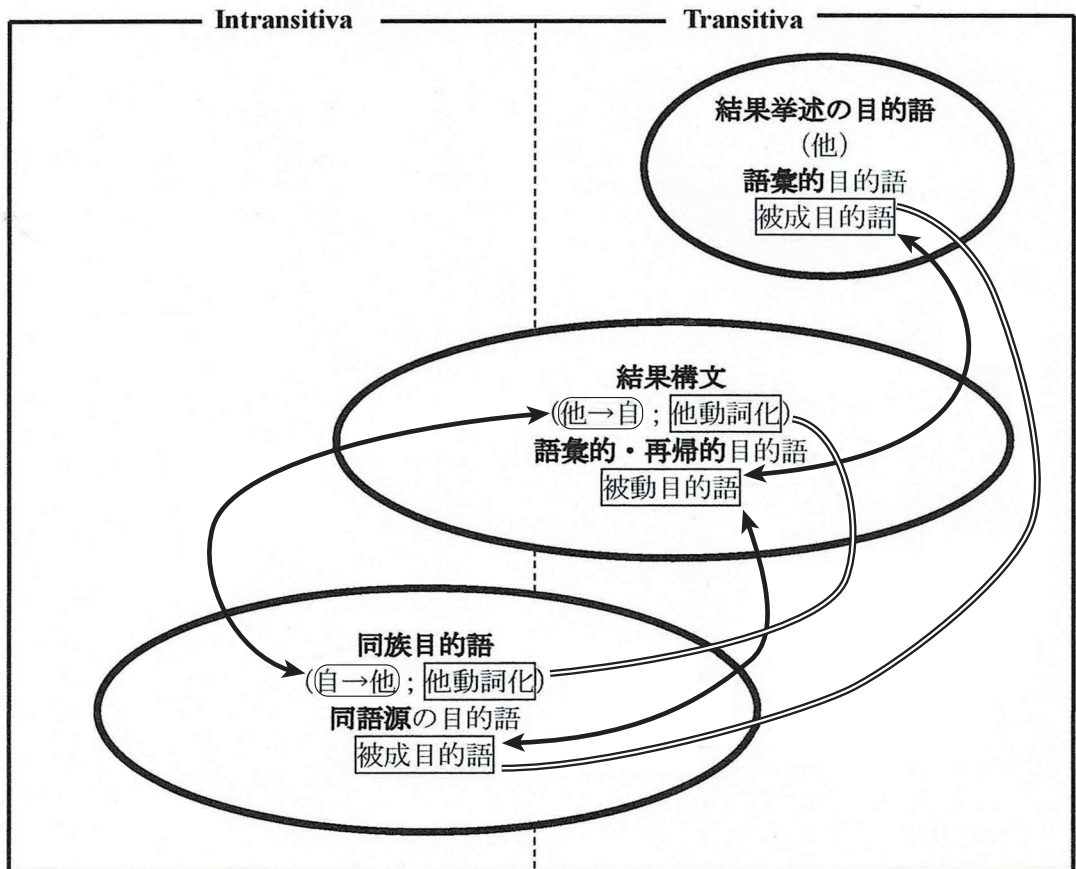


図3：構文ネットワーク（島 2013a: 13；一部加筆修正有）

#### 4. 終わりに

論考執筆者がこれまでに行ってきた研究は、大きく分ければ、ドイツ語の構文に関する研究と、ドイツ語を中心とした言語類型論的・対照言語学的研究にまとめられる。前者に関しては、自動詞型結果構文に生起する結果述語についての論考（Shima/Naruse-Shima 2018）、自動詞型結果構文と同族目的語との機能的類似性・連続性を論じた研究（島 2019a, Shima 2019b）、ドイツ語の構文を文法的ネットワークの観点から分析したもの（島 2013a）、他動詞型結果構文に関する論考（Shima 2013b, Shima 2010a）、結果〔挙述〕の目的語と結果構文の棲み分けに関する論考（Shima 2011）、*aus-*を前綴りとする不変化詞動詞と他動詞型結果構文との比較を行ったもの（Shima/Naruse-Shima 2010a, Shima/Naruse-Shima 2010b）、同族目的語に関する論考（Shima 2010b）などがある。また、後者の言語類型論的・対照言語学的研究に属するものには、同族目的語構文の英独比較に関する論考

(Naruse-Shima/Shima 2013), 言語類型論的観点から見たドイツ語の同族目的語構文に関する論考 (Shima 2006) 結果構文の独日比較に関する論考 (Shima/Naruse-Shima 2017), 結果構文の独英比較に関する論考 (Shima/Naruse-Shima 2015, Shima/Naruse-Shima 2009) などが挙げられる。

今回の構文横断的な分析は、構文ごとの十分な研究の蓄積を前提とし、その詳細な研究成果に裏付けられて始めて可能になるものであり、これまでの構文研究の成果を有機的に結びつけ、より一般的なメカニズムから個別の構文やドイツ語文法の全体像を捉え直すという試みでもであると論考執筆者は捉えている。個別の構文研究の際には意識されにくい構文間の共通性や関連性は、構文間の文法関係を捉えようとする試みを通じて、互いに有意味に関連づけられ、ドイツ語文法のみならず言語類型論的にも有用な文法的メカニズムの解明が可能になると期待している。そのための次の一步として、論考執筆者は現在、結果構文中に前置詞句として生起する結果項の再分析や、文の実質的な意味を動詞派生の名詞句が担う機能動詞結合 (Fuunktionsverbgefüge) と同族目的語の比較を計画している。

## 注

- 1 本論考は、2020年10月7日に京都産業大学ことばの科学研究センターで開催された第2回研究会での発表(「ドイツ語の構文研究：結果構文のネットワーク構造を中心に」)と、2021年2月24日に京都産業大学外国語学部で開催された第2回研究交流会での発表(「ドイツ語の構文研究：構文のネットワーク構造解明を目指して」)に基づき、その内容を発展・拡充させたものである。2つの会では活発な議論や質問を通じて、新しい知見や多くの学術的刺激を得ることができた。ここに記して発表の際にいただいた多数の貴重なコメントや有意義な指摘の数々に改めて感謝の意を表したい。中には今後もさらに検討を要する問題も残っているものの、執筆者との議論を辛抱強く続けてくれた島令子氏にもここで感謝したい。最後に、論考執筆者を常に叱咤激励し、その学問的・人間的魅力で今日まで導き育ててくれた指導教授の名前をここに記し、今回のこの小論を捧げたい：Hans-Jürgen Sasse 教授 († 2015年1月14日)、Heinz Vater 教授 († 2015年6月18日)、森岡ハインツ教授 († 2019年6月30日)、Jörg Mauz 教授 († 2020年6月19日)。
- 2 “... diejenigen Sätze, die zum Ausdruck bringen, dass eine Entität in einem Satz durch den Vorgang des Verbs einen neuen, als Adjektiv denotierten Resultatzustand zugewiesen bekommt. Die Entität, die sich einer Änderung unterziehen muss, wird im transitiven Satz als Objekt und im intransitiven Satz als Subjekt kodiert.“ (Shima/Naruse-Shima 2018: 359)。
- 3 結果構文研究においては、先行研究でも結果状態を表示する「結果項」を形容詞句に限定するだけでなく、前置詞句での生起も認める立場が優勢である。論考執筆者も、基本的には同じ立場をとるが(例えば、Shima 2013b 参照)、本論考での主張が形容詞句として生起する結果項同様、前置詞句として生起する結果項にも等しく当てはまるかどうかについての検討を別途した上で最終的な判断を下したいと考えている。
- 4 例文 a-d は Goldberg/Jackendoff 2004: 563 より、例文 e は Goldberg/Jackendoff 2004: 539 より引用。
- 5 模式的には、他動詞型結果構文は「S (subjekt) + V (erb) + O (bjekt im Akkusativ) + A (djektiv) / RP [= Resultatives Prädikat (結果項)] と、自動詞型結果構文は S + V + A/RP と表示できる。
- 6 この対格目的語と形容詞の間に成立している意味関係は、形容詞語尾の喪失に伴い、現代ドイツ語ではもはや形態的に同定することはできなくなっているものの、Brinkmannによれば、古い時代のドイツ語では、形容詞も叙述関係にある名詞と同じ4格の格語尾をとっていたため、名詞と形容詞の結びつきを形態的に確認できていたという。さらに、形容詞と名詞の間に存在した明示的文法関係が弱まるとともに、動詞と形容詞

を直接関連づける解釈が生まれ、動詞と形容詞のまとまりがより強く意識されることで、新しい他動詞（複合動詞）として語彙化していくという解釈とも結びついていく：“Adjektive verbinden sich mit einem finiten Verbum zu einem Gefüge ..., um die Verfassung zu kennzeichnen, in die ein Objekt durch den verbalen Prozeß gebracht wird. Der Grundfall ist die Verbindung von machen mit einem Adjektiv: Mach’ das Zimmer endlich sauber! Das Adjektiv ist dabei zwar auf das Objekt grammatisch bezogen (sauber auf das Zimmer), aber dieser Bezug ist in der lautlichen Gestalt des Adjektivs nicht artikuliert und darum nicht vernehmbar: Der Richter sprach den Angeklagten frei. Die Folge davon ist, daß die Neigung besteht, das Adjektiv mit dem Verbum zu einer Einheit zu verbinden und in den Fällen zusammenschreiben, in denen das Adjektiv unmittelbar vor dem Verbum steht: ... Das Adjektiv im verbalen Gefüge modifiziert nicht (wie ein Adverb) den Ablauf des Prozesses, sondern hält das Ergebnis der Veränderung fest, zu dem der Prozeß führt. So lässt sich das hervorgebrachte Resultat auch mit Hilfe des jeweiligen Adjektivs als Befund formulieren: Der Richter sprach den Angeklagten frei (danach war der Angeklagte frei) – Ich habe mein Glas leergetrunken (das Glas ist leer) – Er hat mich naßgespritzt (ich bin naß).”

- 7 以下の例文では、結果項に下線をつけ、結果項と叙述関係を結ぶ要素（ここでは対格目的語）を斜字体で表記してある。例文の意味は以下の通り。
- a. 彼は床を (*den Boden*) きれいに (*sauber*) 掃除した (*fegte*)。
  - b. ある人に (*einen*) キスして (*küssen*) 目を覚まさせる (*wach*)
  - c. 彼が咳をしたら (*hustete*) [*彼の*] 隣にいた人 (*seinen Nachbarn*) が病気に (*krank*) なった。
  - d. コーヒーはすでに数分前からテーブルにある。我々はそれが (*ihn*) 冷めて (*kalt*) しまうまで喋った (*haben ... geplaudert*)。
  - e. ある年老いた女性が (*Eine alte Frau*) 叫んで (*schreit*) 声を (*sich*) 枯らす (*heiser*)。
  - f. お前の病気は、何もしていないから生じるので、そろそろいいかげん働いて [*お前自身が (dich)*] (*arbeiten*) 健康に (*gesund*) ならなければならん。
  - g. ペーターは自分の相手が (*seine Partnerin*) 疲れるまで踊る (*tanzt*)
  - h. ここに曲がった釘が (*krumme Nägel*) かなりある。お前はこの金槌で (*mit diesem Hammer*) それらを (*sie*) まっすぐに [*なるよう*] (*gerade*) 叩き (*klopfen*) なさい。
  - i. 彼は自分の皿 [*の料理*] (*seinen Teller*) をすっかり (*leer*) 食べた (*aß*)。
  - j. 私は徹夜して、指が (*die Finger*) 痛く (*wund*) なり、両眼が (*die Augen*) 真っ赤に (*rot*) なるまで字を書いた。
  - k. 彼は自分が (*sich*) 満腹に (*satt*) なるまで食べた (*hat ... gegessen*)。
  - l. 泥棒は (*Ein Dieb*) モノを盗んで (*stiehlt*) 自分が (*sich*) 裕福になる (*reich*) ことはめったにない。
- 8 対格目的語と結果項の間に生じる意味関係には一定の制約が働いている。動詞の行為や過程から通常想定できない結果状態や矛盾するもの、動詞の意味にすでに含意されているものは許容されない。詳細は、Rapp (1997: 107) を参照。
- 9 このことは、自動詞であっても結果構文の中に生起することで、あたかも他動詞の様に対格目的語を支配することができるようになることを意味している。この点は他動詞型結果構文を「他動詞化のメカニズム (Transitivierungsmechanismus)」の一部と見ている Zifonun *et al.* (1997: 1114) の観察や、構文自体が動詞に下位範疇化されていない対格目的語の生起を可能にするという Goldberg (1995: 189) の主張とも整合性を持つ。
- 10 このことから自動詞を基底動詞とする結果構文のうち、少なくとも一部は前置詞付きの自動詞文と関連の深いものがあると考えられる。

- 11 Washio (1997), Kaufmann/Wunderlich (1998), 西村 (1998), 湯浅 (2000), 都築 (2004) 等の先行研究では、結果構文の中に複数のタイプを認めた上でそれぞれの結果構文がどのように生成されるのかという分析を進めている。しかし西村 (1998), 都築 (2004) 等の試みを除けば、個々の結果構文での統語的・意味的特質の解明に力点が置かれているため、結果構文の中にはいくつかのタイプに分けられるほど有意味な違いがある点が十分強調されてはいるものの、違いがあるにもかかわらず全体としてなお一つの構文としてまとめることができるよう複数のタイプ間を互に関連・関係づけるという側面にはまだ踏み込みが足りない印象を受ける。なお、西村 (1998) では結果構文の用法の「広がり」、湯浅 (2000) では「拡張」という用語が使われているが、前者は結果構文の中でプロトタイプから非プロトタイプへと事例を相互に関係付けるために使われているのに対して、後者はより基本的な文から結果述語を持つ文へと変化していく、いわば結果構文の生成過程を示している。
- 12 対格目的語 *seinen Teller* は、動詞 *essen* が本来的に要求する目的語である「食物」からその食物の「存在場所」へとメトニミーに基づいて変換され、結果挙述の形容詞 *leer* と意味関係を結んでいるとも考えられる。
- 13 動詞の選択制限は変化し、動詞の本来的な対格目的語が生起するのではなく、結果項との叙述関係とメトニミーなどを介在させて生じた対格目的語との間に、言わば間接的な「他動詞と対格目的語との統語関係」を樹立しているとも解釈できる。
- 14 ST 3a - ST 2c - ST 2a の系列は、動詞と対格目的語の間に見られる「間接性」とでも呼ぶことのできる関係が繋いでいると考えられるだろう。なお、ST 2a に分類される例文 (9) の 2 例では、「耳 (*die Ohren*) と電話で話す行為 (*telefonieren*)」あるいは「唇 / 膝 (*die Lippen / die Knie*) と祈る行為 (*beten*)」といった言語表現の間には、本文で議論したような狭義の文法関係は求められないものの、語用論的な関連性は十分にみて取ることが可能である。
- 15 例文の意味は以下の通り。
- a. (受話器を当てる) 耳が痛くなってしまうほど電話で話をするのが好きな人向きの仕事
  - b. 何年もの間祈り続け、唇も膝も痛めてしまう必要はなかつただろうに。
- 16 Petra Hammesfahr (1999/2000<sup>4</sup>). *Die Sünderin*. Reinbek: Rowohlt Taschenbuch Verlag の 277 頁。
- 17 上掲書 308 頁。
- 18 再帰形の対格目的語を有する ST 2b, ST 3b を除いて、他動詞型結果構文は受動文に変形することも可能である (Staudinger 1997 参照)。これらは文体的にはかなり有標な表現にはなるが、自動詞を基底動詞としている ST 2a や ST 2c でも受動文が可能であるということは、拡張型も含めて、ここで仮定したサブタイプがそれぞれ他動詞型結果構文という 1 つの文法的カテゴリーのメンバーであることを示している。
- 19 例文の意味は、以下の通り。
- a. 彼 (女) らは大笑いした。
  - b. 子供たちは死ぬほど笑った。
  - c. 「昨晚仕事が全然無かったことをカンカンに怒ることだってできるだろうに」と一人の給仕は言う。
- 20 Goldberg/Jackendoff (2004) の分類では、Noncausative property resultative に相当する。
- 21 「人間の知覚や五感に深く関係する」という視点は、自動詞型結果構文の結果項のみならず、独英両言語の同族目的語構文を比較分析した成果をまとめた意味地図 (semantic map) からも読み取れる。詳細は Naruse-Shima/Shima (2013) を参照。
- 22 以下の例文では、他動詞型結果構文の場合同様、結果項と叙述関係を結ぶ要素 (ここでは主語) を斜字体で表記し、結果項に下線をつける。
- 23 例文はミヒャエル・エンデ (Ende, Michael) 著 *Der Wunschpunsch* (München: Wilhelm Heyne Verlag, 1989/1998) より引用し、日本語訳は川西美沙訳の『魔法のカクテル』(岩波少年文庫, 2019) を参考にした:

- すみませんが、尻尾が杖みたいにコチコチに凍って感覚がなくなったから ...
- 24 例文は宮沢賢治著『注文の多い料理店』（新潮文庫、2011<sup>43</sup>）より引用し、ドイツ語訳は Johanna Fischer の "Miyazawa, Kenji. *Die Früchte des Ginkgo: märchenhafte Erzählungen aus Nord-Japan.*" (Stuttgart: Neske, 1994<sup>2</sup>) より引用した。原文（「なめとこ山の熊」より）は次の通り：すばるや参の星が緑や橙にちらちらして ...。
- 25 Rapp (1997: 107) が指摘するように、他動詞型結果構文でも基底動詞と結果項の間に生じる意味関係には一定の制約が働いており、動詞の行為や過程から通常想定できない結果状態は許容されない (\*Er streichelte die Katze grün.)。その一方で、Marga Reis が指摘するように (Rapp1997: 107)、緑色のペンキがついた手で猫を撫でる状況を考えることで当該文の容認度が上がるとすれば、結果構文に成立している意味関係が多分に語用論的な性格を有していることを示唆することになる。
- 26 DGWDS (2005: s.v.) によれば、"Licht in vielen kleinen, zitternden Punkten zurückwerfen; unruhig, zittrig leuchten, funkeln" と記載されている。
- 27 色彩語として生起している結果項が、知覚者の感覚や判断の結果として言語化されるのであれば、その結果項が担う意味は視覚領域に限定されることはないと予測される。実際、主観的に知覚された結果状態を描写する結果構文の例文は、聴覚領域でも確認されている。詳細は、島 (2019a) を参照。
- 28 主観的な自動詞型結果構文である例文 11b と同様な考え方は、以下の例にも当てはまる：  
 Statt dessen spürte Jakob plötzlich, dass ihn ein herrlich warmes, blauschwarz glänzendes Gefieder zierte, schöner, als er je zuvor in seinem Leben eins gehabt hatte. (M.Ende, S. 220)  
 ヤーコブは、ツヤツヤと漆黒にひかる羽で覆われているのをこれまでになく、感じた (S. 285)
- 29 図 2 では、この結果状態の主観的把握を ST 5 中の結果項 (A) をゴシック体にすることで表現している。
- 30 被動目的語の例文は以下の通り：  
 a. Mein Freund bepflanzt **seinen Garten**. (Zifonun et al. 1997 : 1325)  
 友人が庭に植物を植える。  
 b. **Wasser kochen / den Acker pflügen** (DGWDS: 同上 / 'affiziert' の中の例文)  
 水を沸かす / 畑を耕す
- 31 例文の意味は以下の通り：  
 a. カールは、鍋用の布巾を編んでいる。  
 b. コーヒーを沸かす
- 32 ことばの科学研究センターの第 2 回研究会で発表した際には、両構文の差異を Croft (1991, 1998) の Causal Chain Model を用いて図示したが、本論考では割愛する。
- 33 同族目的語の定義は学者により異なり、同語源の対格目的語に加えて、「意味的に同系の対格目的語」を加える場合や、基底動詞を自動詞に限らず、他動詞を含める立場もある。詳細は Naruse-Shima/Shima (2013) も参照。
- 34 島 (2019: 注 6) 参照：「検討したパラメータは、*Participants, Affectedness, Individuation, Aspect* の 4 種で、他のパラメータ値は内在的目的語の有無には影響されない。つまり内在的目的語が生起している文は、形態統語論的に具現化した対格名詞句が文中に生起するため参加者が多く (*Participants*)、また当該文肢は、動詞の表す行為によって生成されるという点で被成目的語であると考えられる (*Affectedness*)。さらに、内在的目的語は、状況に応じて具体的、指示的、可算的な性質を帯びる点で個性性を有し (*Individuation*)、被成目的語である当該文肢が文中に生起していることで文全体は完了相となる (*Aspect*) と考えられる」。
- 35 例文の意味は以下の通り：  
 a. 君は情熱的な踊りを踊った。  
 b. 彼は悲しい人生を生きている。



- c. 彼女は厳しい戦いを戦っている。
- 36 厳密には、Tod と sterben は同語源に基づく同族目的語ではなく、「死」と「死ぬ」という意味的に関連する同族目的語となる。また、グリムのドイツ語辞典 (1935/1984: 2418) によれば、動詞 sterben は、対格名詞の Tod だけではなく、属格の Todes と結びつくことがある。これは元来古高ドイツ語の道具格に由来するもので、今日では *todes* と *hungers* のみが一般的であるという。また、DGWDS (2005) によれば、sterben の属格表現は現代ドイツ語では「格調高い表現 (gehoben)」で、日常的には副詞類か前置詞句で表現されるという。
- 37 本論考では割愛したものの、文中から動作主を降格させることで残った文肢を前景化させる機能を有する中間構文も考慮すれば、他動詞型構文である中間構文では文の必須項である動作主を降格させ、1つ減らす仕組みである、いわば「自動詞化メカニズム」が働いていると考えられる。詳細は、島 (2019a) を参照。

## 参考文献

- Brinkmann, H. (1962/1971<sup>2</sup>): *Die deutsche Sprache: Gestalt und Leistung*. Düsseldorf: Schwann.
- Croft, W. (1991): *Syntactic Categories and Grammatical Relations*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Croft, W. (1998): Event Structure in Argument Linking. In: Butt, M./Geuder, W. (eds.): *The Projection of Arguments: Lexical Compositional Factors*. Stanford, CA: CSLI Publications, 21-63
- Curme, G.O. (1977): *A Grammar of the German Language*. New York: Frederick Ungar Publishing Co.
- DGWDS: Office-Bibliothek (2005). *DUDEN Das große Wörterbuch der deutschen Sprache* (2000). Mannheim: Bibliographisches Institut & F.A.Brockhaus.
- Duden Band 4: *Die Grammatik* (2009). 8., überarbeitete Aufl. Mannheim/Wien/Zürich: Dudenverlag.
- Eisenberg, P. (1998/2000): *Grundriß der deutschen Grammatik*. Bd. 1 Das Wort. Stuttgart/Weimar: Metzler.
- Götze, L. / Hess-Lüttich, E.W.B. (1989): *Knauers deutsche Grammatik: Sprachsystem und Sprachgebrauch*. München: Knauer.
- Goldberg, A.E. (1995): *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*. Chicago/London: UCP.
- Goldberg, A.E. / Jackendoff, R. (2004): The English resultative as a family of constructions. In: *Language* 80.3, 532-568.
- Grimm, J. / Grimm W. (1935/1984): *Deutsches Wörterbuch*. 33 Bde. München: Deutscher Taschenbuch Verlag (Nachdruck der Erstausgabe 1935).
- Hopper, P.J. / Thompson, S. (1980): Transitivity in Grammar and Discourse. In: *Language* 56.2., 251-299.
- Kaufmann, I. / Wunderlich, D. (1998): *Cross-linguistic Patterns of Resultatives*. Heinrich-Heine-Universität Düsseldorf: Seminar für Allgemeine Sprachwissenschaft (Theorie des Lexikons. Arbeiten des Sonderforschungsbereichs 282. Nr. 109).
- Lakoff, G. (1987): *Women, Fire, and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind*. Chicago: UCP.
- Lüdeling, A. (2001): *On Particle Verbs and Similar Constructions in German*. Stanford, CA: CSLI Publications.
- Naruse-Shima, R. / Shima, N. (2013): Kognate Objekte im Englischen und Deutschen - Eine kontrastiv-semantische Analyse. In: 京都産業大学論集 人文科学系列 第46号, 371-391.
- 西村義樹 (1998). 「行為者と使役構文」. In: 中右実・西村義樹. 『構文と事象構造』. 日英語比較選書 5. 東京: 研究社, 107-203.
- Rapp, I. (1997): *Partizipien und semantische Struktur: Zur passivischen Konstruktionen mit dem 3. Status*. Tübingen: Stauffenburg.

- Schulz, D. / Griesbach, H. (1960/1972): *Grammatik der deutschen Sprache*. München: Hueber (9. neubearbeitete Aufl.).
- 関口存男 (1931/1994): 『関口存男生誕 100 周年記念著作集 ドイツ語学篇 6 (=独逸語大講座 第 4 卷)』. 東京: 三修社.
- 関口存男 (1953/1982<sup>19</sup>): 『独作文教程』. 東京: 三修社.
- 関口存男 (1979<sup>7</sup>/1994): 『関口存男生誕 100 周年記念著作集 ドイツ語学篇 3 (=ドイツ語学講話)』. 東京: 三修社.
- Shima, N. (2006): Das kognate Objekt im Deutschen aus sprachtypologischer Sicht. In: Kürschner, W. / Reinhard R. (Hg.). *Linguistik International: Festschrift für Heinrich Weber*. Pabst Science Publishers, 561-576.
- Shima, N. (2010a): Über die Vielfältigkeit resultativer Konstruktionen im Deutschen: Ein Erklärungsversuch ihrer Genese. In: 京都ドイツ語学研究会 *Sprachwissenschaft Kyoto* 9, 3-19.
- Shima, N. (2010b): Inneres Objekt als grammatischer Transitivierungsmechanismus. In: Ten Cate, A. / Reinhard R. et al. (Hg.). *Grammatik · Praxis · Geschichte: Festschrift für Wilfried Kürschner*. Tübingen: Narr, 89-96.
- Shima, N. (2011): Ergebnisobjekte im Deutschen - Ein Erklärungsversuch ihrer Genese. In: Kürschner, W. / Reinhard R. et al. (eds.) *Neue Linguistische Perspektiven: Festschrift für Abraham P. ten Cate*. Frankfurt a.M.: Peter Lang, 55-66.
- 島憲男 (2013a): 文法的ネットワークの観点から見た構文の拡張と動詞の他動性. In: 京都ドイツ語学研究会 *Sprachwissenschaft Kyoto* 12, 1-23.
- Shima, N. (2013b): Vielfalt und Einheit der grammatischen Erscheinungen im Deutschen - Ein Vergleich der Resultativen Konstruktionen mit den in der SEKIGUCHI-Grammatik entwickelten Begriffen *Lativum* und *Ergebnisprädikat*. In: 京都産業大学論集 人文科学系列 第 46 号, 355-370.
- 島憲男 (2019a): 構文間の機能的関連性 — 内在的目的語を持つ表現と結果述語を持つ表現をむすぶもの. In: 京都ドイツ語学研究会 *Sprachwissenschaft Kyoto* 18, 31-43.
- Shima, N. (2019b): Wie können grammatische Konstruktionen miteinander verbunden werden? Funktionale Korrelation zwischen Kognaten Objekten und Resultativen Prädikaten. In: 京都産業大学 総合学術研究所報 14, 31-45.
- Shima, N. (2020): Strukturierungen und Erweiterungen der Resultativen Konstruktionen im Deutschen : unter besonderer Berücksichtigung der Transitivität des Hauptverbs und des Resultativen Prädikates. In: 京都産業大学論集 人文科学系列 第 53 号, 153-166.
- Shima, N. / Naruse-Shima, R. (2009): Eine kontrastive Textanalyse der resultativen Konstruktionen im Deutschen und Englischen. In: 京都産業大学論集 人文科学系列 第 40 号, 33-49.
- Shima, N. / Naruse-Shima, R. (2010a): Objektwechsel bei Partikelverben im Deutschen: Unter besonderer Berücksichtigung Privativer Verben mit der Partikel *aus-*. In: 京都産業大学論集 人文科学系列 第 42 号, 73-86.
- Shima, N. / Naruse-Shima, R. (2010b): *Leer essen* oder *ausessen*? Die Konkurrenz zwischen Resultativen Konstruktionen und Partikelverben im Deutschen. In: Japanische Gesellschaft für Germanistik (Hg.). *Grammatik und sprachliches Handeln*. München: iudicium, 110-124.
- Shima, N. / Naruse-Shima, R. (2015): Resultative Konstruktionen im Englischen und Deutschen - Einheitlichkeit und Vielgestaltigkeit der grammatisch-funktionalen Manifestationen in ausgewählten Texten. In: Toth, Jozsef (Hg.). *Die Sprache und ihre Wissenschaft zwischen Tradition und Innovation*. Frankfurt a.M.: Peter Lang, 267-276.
- Shima, N. / Naruse-Shima, R. (2017): Resultative Konstruktionen aus grammatisch-funktionaler Perspektive -



- Analogische und vielgestaltige Verwirklichungen in deutschen und japanischen Texten. In: 京都産業大学論集 人文科学系列 第50号, 145-161.
- Shima, N. / Naruse-Shima, R. (2018): Resultative Konstruktionen als Wahrnehmungsmechanismus. In: Zybatow, N.L. / Petrova, A. (eds.) *Sprache verstehen, verwenden, übersetzen*. Berlin: Peter Lang, 359-363.
- Staudinger, Bernhard (1997): *Sätzchen: Small Clauses im Deutschen*. Tübingen: Max Niemeyer (= LA 363).
- 都築雅子 (2004): 「行為連鎖と構文Ⅱ：結果構文」. In: 中村芳久編. 『認知文法論Ⅱ』. シリーズ認知言語学入門第5巻. 東京：大修館, 89-135.
- Washio, Ryuichi (1997): Resultatives, Compositionality and Language Variation. In: *Journal of East Asian Linguistics* 6, 1-49.
- Wittgenstein, Ludwig (1953): *Philosophical Investigation*. New York: Macmillan.
- 湯浅英男 (2000): 「ドイツ語の結果構文の二つのプロトタイプについて」. In: 阪神ドイツ語学研究会会誌 12, 7-30.
- Zifonun, G. / Hoffmann, L. / Strecker, B. u.a. (1997): *Grammatik der deutschen Sprache*. 3 Bde. Berlin/New York: Walter de Gruyter.

# Grammatical Network of Constructions in German: Resultative Constructions and Studies of Constructions

Norio SHIMA

## Abstract

This paper takes up three German grammatical constructions with an accusative object as an argument (*Satzglied*); resultative constructions, constructions with cognate object, constructions with effective object, and aims to show that a cross-constructional approach of these constructions reveals how much more detailed common features and relevant grammatical properties are shared among them. By carrying out such a cross-constructional analysis, rather than taking a single construction at a time, we will be able to see more general grammatical mechanisms in German grammar, and it will also throw light upon some unconscious universal relations or differences among certain grammatical constructions which are hard to capture by analyzing a construction as a single unit.

**Keywords :** Grammatical Network of Constructions, Resultative Constructions, Studies of Constructions, Cognate Objects, Effective Objects